

ハンガリーに赴任して思うこと

在ハンガリー日本国大使館 二等書記官

たけした はるこ
竹下 晴子

1. はじめに

ハンガリーに赴任してちょうど2年が経った。読者の中には、筆者のことをご存知の方もいらっしゃるかと思う。この場をお借りして、お世話になった全員の方々にお礼を申し上げたい。ハンガリーはITUジャーナルの読者の方々にとって馴染みのない国だと思う。確かに、ハンガリーはICT分野での先進国ではない。だが、既存技術の活用が上手く、日本がこの国から学べることもあると思う。そこで、最近ハンガリーで始まった新サービスとともにハンガリーを紹介したいと思う。

さて、読者の皆様はハンガリーの位置をご存知だろうか。ジュネーブからほぼ真東に1,200kmほど離れたところにハンガリーの首都ブダペストがある。ジュネーブからブダペストへ向かう途中に通過する国はドイツとオーストリア。ハンガリーの人口は約980万人で、周囲を7つの国（北から時計回りに、スロバキア・ウクライナ・ルーマニア・セルビア・クロアチア・スロベニア・オーストリア）に囲まれている。国土は、日本の4分の1弱の大きさである。平坦で国土がそれほど大きくないハンガリーは、無線回線の設計がしやすいのではないかと思う。

なお、ここで一つハンガリーとジュネーブのつながりを紹介しておきたい。この国（実際にはオーストリア＝ハンガリー二重帝国）の皇后として有名なエリザベート（1837～1898年）がいる。彼女はレマン湖畔で暗殺されてその生涯を終えた。ジュネーブのパキ地区側のフェリー乗り場近くにエリザベートのモニュメントがある。ハンガリー赴任後に、ジュネーブとのつながりを知ることができたことは、とても嬉しいことであった。



■写真1. ブダペストの夜景。中央はドナウ川

2. ハンガリー語で数字の「ゼロ」は電波の世界と同じ？

ハンガリー人の大多数を占めるマジャル人は、その起源がアジアにあると言われている。公用語であるマジャル語の中には日本語と似ているものがいくつかある。例えば「水（みず）」はマジャル語で「víz（ヴィーズ）」と言い、音が似ている。また、料理の塩気が足りない時に「塩足らん（シオタラン）」と言うと、ハンガリー人は理解してくれる。実は、マジャル語で「Sótalán（ショータラン）」は、塩味が薄いという意味なのである。ただ、一般的にハンガリー料理は味付けが非常に濃いので、この言葉が実施に役に立ったことはないのだが。

このように少ないながらも日本語との共通点がいくつかあるマジャル語だが、数字は全く異なる。1から10を覚えるだけでも一苦労だ。しかし、「ゼロ」だけは一発で覚えることができた。なんと、マジャル語で「ゼロ」のことを「nulla（ヌッラ）」と言うのである。アンテナから放射された電波が干渉しあって打ち消し合う不感点（null）と似ているのである。なので「ゼロ」だけは簡単に覚えることができた。

3. 欧州初のスマート・ホテル

ITUにおけるプレゼンスはそれほど高くないハンガリーだが、最近、ブダペスト市内にICTを活用した欧州初の「スマート・ホテルKViHotel Budapest」がオープンしたので紹介したい。

このホテルを利用するために、スマートフォンにホテルの専用アプリをインストールし、客室を予約するところまでは、既に出回っている複数の旅行アプリと同じである。だが、このホテルでは、予約からチェック・イン、客室内設備のコントロール、ルームサービス依頼、チェックアウトまで、スマートフォン1台で全ての手続き・作業を終えることができるのである（写真2はアプリ画面の一部）。しかも、ホテルの従業員と対面することなくこれらを終えることができるのだ。ホテル側によると、このホテルは「欧州初」のスマート・ホテルとのこと。

まずはチェック・イン。ホテル・ロビーにおいて、アプリの「チェック・イン」ボタンをクリックしてチェック・インを行うと、アプリ上に客室番号が表示されるとともに、客室番号が宿泊客のスマホのアプリを使ってロビーと宿泊客用スペースを仕切っている扉と客室の扉を開けるための「鍵（写真2の「Open

Door」のボタン)」の使用権限が与えられる。宿泊客は、この鍵を使って宿泊スペースに入るわけだが、操作は非常に簡単だ。扉に設置されているセンサーへ自分のスマホを近づけ、「鍵」ボタンをクリックするだけなのである。カチッと音を立てて扉が開けば、宿泊客はロビーから宿泊客用スペースに入ることができる。なお、この扉を開けるために使われている通信方式はBluetooth。

宿泊スペースに入ったら、宿泊客は自分の部屋の前まで行き、もう一度、自分の部屋の扉の前で「鍵」ボタンをクリックすれば客室に入ることができる。なお、宿泊客の身分を証明するIDカードやパスポートのコピーはスマホで撮影して、それをホテル側へあらかじめ送っておく。このように、チェック・インから客室に入るまで、スマホ1台で全てを行うので、当然ながらロビーに常駐しているスタッフは一人もいない。緊急時にはアプリを使ってホテルに連絡を取ることが可能な上（もちろん電話も可）、セキュリティ会社による管理も行われており、安全性は確保されている。

客室に入った後は、同じくアプリを使って、TVを操作したり、エアコンの調整をしたりすることができる。ルームサービスを注文したい場合は、アプリを使って近隣レストランからデリバリーを注文することが可能だし、朝食や客室清掃、クリーニングの依頼もアプリを使う。もちろん、ホテルの外でアプリを使うこ

とも可能なので、ホテルに戻る前に客室の温度を確認し、エアコンの温度設定を変更することも可能である。チェック・アウトも同様にこのアプリを使う。その上、通常のホテルと同様に、チェック・アウト後にホテルに荷物を預けることも可能。ロビーには鍵付きロッカーが設置されており、同じアプリを使ってロッカーの施錠・開錠を行うので、宿泊客以外の人がこのロッカーを使うおそれもない。

このホテルのシステムと専用アプリは6名のハンガリー人が開発した。開発のコンセプトは、宿泊客がホテルとのやりとりで費やす不要な時間の削減と、ホテルのバックヤードの削減。システム開発に関わったハンガリー人は、なんら新しい技術は開発せず、既存の技術の組み合わせだけで新しいホテルをオープンさせた。このように、ハンガリーは既存技術の活用が上手なのである。

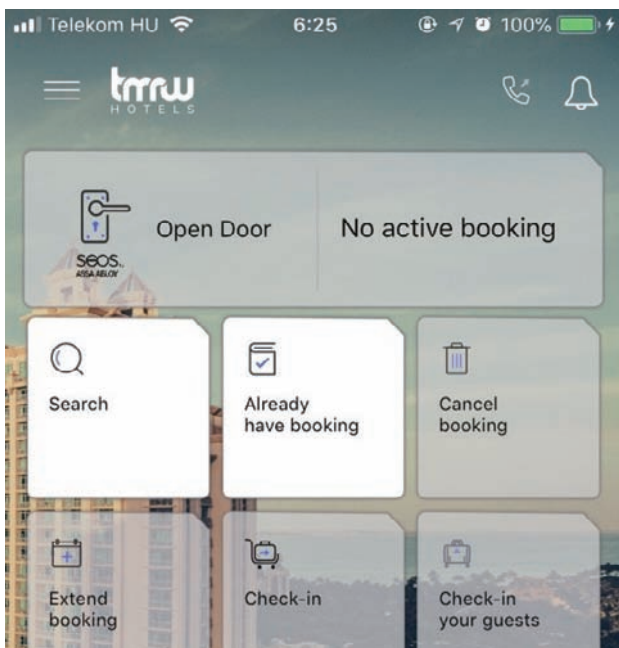
4. 2019年は日・八外交関係樹立150周年

2019年、日本とハンガリーは外交関係樹立150周年を迎える。1869年10月17日、両国（ハンガリー側は当時のオーストリア＝ハンガリー二重帝国）は日墺修好通商航海条約を締結した。これは日本が江戸時代から続く鎖国政策をやめ、明治時代（1868年～1912年）に入ってすぐにハンガリーと外交関係を結んだことを意味している。明治維新直後の日本が遠いヨーロッパの国と外交関係を結んだことは、とても感慨深い。

2019年には日本とハンガリーにおいて様々な記念行事が行われる予定である。読者の中にはWRC-19（2019年10月開催予定）でそれどころでないという方もいるかと思うが、一息ついた際に150年前の歴史に想いを馳せていただけると嬉しく思う。

5. おわりに

東欧という国で生活して初めて、ヨーロッパの国々は全く一つにまとまっておらず、西欧と東欧の違いを身をもって体験した。ヨーロッパの歴史と社会構造は日本に居ては分からない複雑なものだった。かつてITU会合に臨む時にはヨーロッパをCEPT（欧州郵便電気通信主管庁会議）の枠で捉えることが少なくなかったが、今ではもっと複雑な歴史的・社会的背景を考える必要性を強く感じている。今後は、この経験を将来の業務に活かすとともに、様々な方と共有していきたいと思う。



■写真2. スマート・ホテルのアプリ画面